町　田　1　号　塚

例　　言

1．本書は高町団地（施工主・大倉漁業株式会社）の造成工事に伴って実施された新潟県長岡市町田町字金山にある町田1号塚の発掘調査記録である。

2．調査は長岡市教育委員会が主体者となり，駒形敏朗が調査を担当し，狩野幸・監物操子の協力があった。

なお，調査費用は大倉漁業株式会社が負担した。

3．遺跡・遺構の写真撮影，測量及び遺物の整理等は駒形を中心に，狩野・監物があたり，株式会社福田組高町団地作業所職員の協力があった。

4．挿図のうち，第6図の断面図わきの数字は標高を示す。

5．本書は図版の作成から本文執筆まで，駒形が行った。

6．発掘調査から本書の作成まで，多くの方々や機関から御指導・御協力を賜った。氏名等は銘記しませんが，ここに深く感謝の意を表します。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1．調査に至るまで……1
　2．発掘調査の経過……1

Ⅱ　遺跡の環境……2

Ⅲ　塚……2
　1．外部形態……2
　2．土層序……5
　3．周　　溝……7
　4．内部施設……7
　5．遺　　物……7

Ⅳ　ま　と　め……9

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図……3
第 2 図　遺跡周辺図……4
第 3 図　町田1号塚実測図……5
第 4 図　第1号・第2号石組と基底部……6
第 5 図　出土土器……7
第 6 図　土層断面図……8

図　版　目　次

図版第1図　塚付近の航空写真
図版第2図　町田1号塚：遺跡遠景・遺跡近景
図版第3図　調査スナップ
図版第4図　遺跡近景・北壁土層断面・西壁土層断面
図版第5図　内部施設：第1号石組・第2号石組・基底部

Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至るまで

高町団地造成の端緒は昭和49年に遡ぼる。この団地造成の施工に先だち，県教育庁文化行政課の職員駒形敏朗と和田寿久（いずれも当時）が長岡市教育委員会職員と合同で遺跡確認調査を実施した。この結果，新たに町田1号塚と町田2号塚が確認され，従来から知られている町田城跡の3遺跡が造成計画地内に所在することが確認された。これらの遺跡の取扱いについて，県教育委員会・市教育委員会・施工主である大倉漁業株式会社の間で協議が重ねられた。町田1号塚及び町田2号塚は造成計画地の中心に位置するため現状保存は困難であり発掘調査を実施し，記録保存することとなった。町田2号塚は，昭和51年に中村孝三郎氏が発掘調査され，町田2号塚の発掘調査は諸般の事情により昭和57年11月まで延期されることとなった。なお，町田城跡は先人の残した貴重な文化遺産であり，小規模ながら山城としての遺構を残していることから，現状を保存し，後世に伝える方向で協議が整った。そして，昭和57年に長岡市教育委員会と大倉漁業株式会社の間で本遺跡について協議を行ったところ，同社の文化遺産に対する積極的な理解により，史跡公園として整備されることになった。今後は，多くの人々により，この町田城跡が歴史を学ぶ一つのよりどころとして，又，市民の憩う場として広く活用されることを期待している。

2．発掘調査の経過（日誌抄）（図版第3図）

11月1日　調査に先立ち，町田1号塚の供養祭（導師　押見智浄師）を施工主主催で行う。

2日　塚を4発掘区に区画し，調査に入る。土層断面観察用の土手を残して，各区とも地山面近くまで掘り進む。旧表土（？）で縄文土器が出土。塚中央の封土中で石組（第1号石組）を検出する。

3日　旧表土面で第2号石組が発見される。第2号石組中に須恵器片が混っていた。周溝が発見される。第1号石組の写真撮影・実測が終る。

4日　周溝全体を把握するため，基底部を精査する。周溝の発掘に入る。周溝は塚の裾より内側をめぐっているように思われる。

5日　土層断面の写真撮影・実測作業を周溝の発掘と並行して行う。

6日　土層断面の実測が終り，観察用の土手を順次発掘する。この作業により，第2号石組の全容が明らかになる。第2号石組を清掃し，写真撮影・実測に入る。本日で作業は終る。周溝の発掘も終り，基底部実測用の釘打ちをする。

8日　第2号石組を取り除き，旧表土を発掘し，基底部遺構の検出につとめるが，遺構は確認されない。引き続き基底部の写真撮影・実測をし，本日で発掘調査を終る。

II　遺跡の環境

町田１号塚は長岡市の中央を流れる信濃川の右岸で，国鉄長岡駅の南方約3.5kmの丘陵上に２号塚ともども所在している。塚が所在する丘陵は，長岡市の東方を南から北へのびる魚沼山地が，西の沖積地（新潟平野）と接するように位置している。標高は約90ｍで，沖積地との比高は60ｍある。この丘陵は東から北へう回するように柿川が流れ，南は青木町との境に沢が入り，あたかも独立丘陵の様相を呈していた。町田１号塚は丘陵の分水嶺に，２号塚とは約20ｍの距離をへだてて立地していた。現況は雑木が主体の山林である。

長岡市の東方一帯は東山と通称され，栖吉城跡・高津谷城跡をはじめとする中世の山城跡が多く所在し，東山と信濃川との間に開けた沖積地には城館跡（第１図の黒点）が点在している。しかし，本遺跡と同じ塚は，二基所在する長者塚や，経塚の糠塚が知られているにすぎない。

また，この地域には永正10年（1513）作の薬師如来や，大永６年（1526）作の十二神将を伝える円融寺や，満願寺の法灯を受け継ぐという応永24年（1417）製作の鰐口を保存する釜沢の観音堂があり，長岡市内でも古くから歴史の舞台となっていたことが知られている。

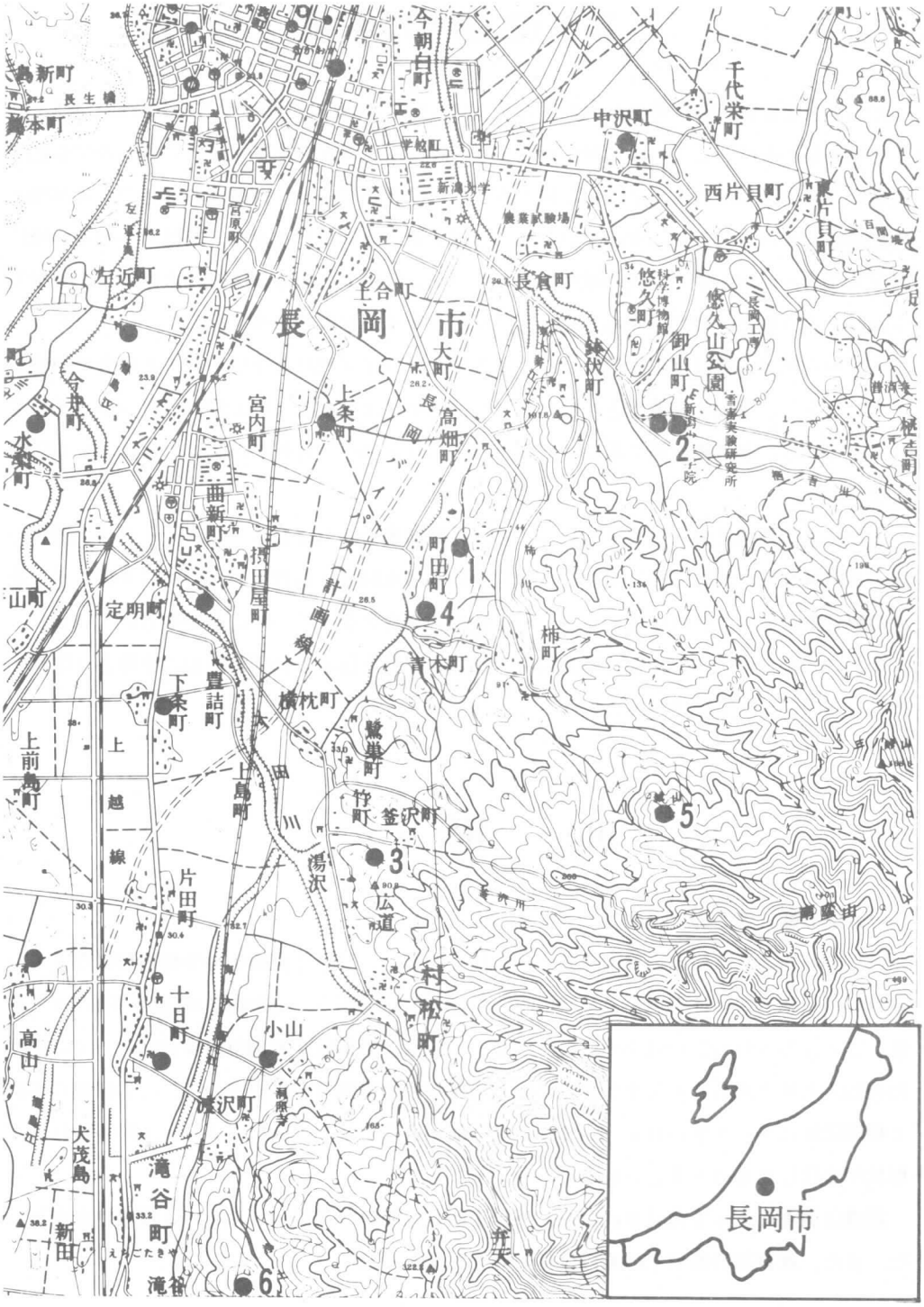
なお，ちなみに町田１号塚は慶長17年（1612）開基と伝える長岡市町田の浄照寺（住職・押見智浄師）の所有地であった。

III　　塚

１．外部形態（第３図）

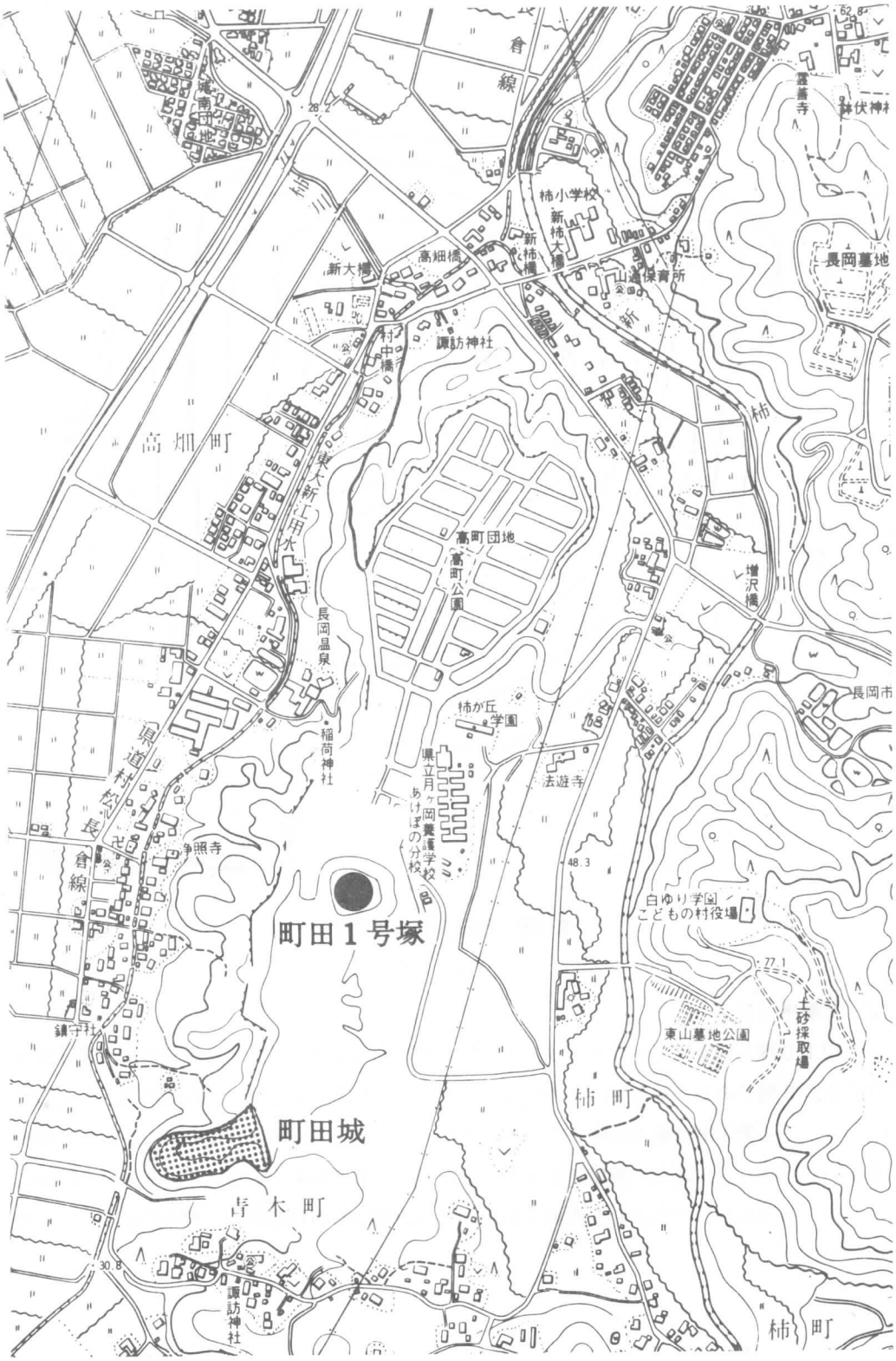
町田１号塚は丘陵尾根の雑木林の中に立地していた。形態は南側がやや楕円形になっているものの，基本的には方形を呈していた。規模は墳丘裾部の一辺が約７ｍ，高さ約1.2ｍである。墳頂はおおむね2.4×1.8ｍの方形になっていた。墳頂近くの南斜面は盗掘もしくは樹木の抜根の痕跡と思われる凹地がある。塚の南側がやや楕円形を呈するのは，この凹地の形成と相関関係にあると思われる。つまり，南斜面が盗掘もしくは抜根により，土砂が流れて，形状が変化したものと考えられる。

周溝は調査によって発見されたが，外形上からは明瞭な周溝の落ち込みは観察されなかった。また，葺石等の外形上の施設は何ら存在しなかった。

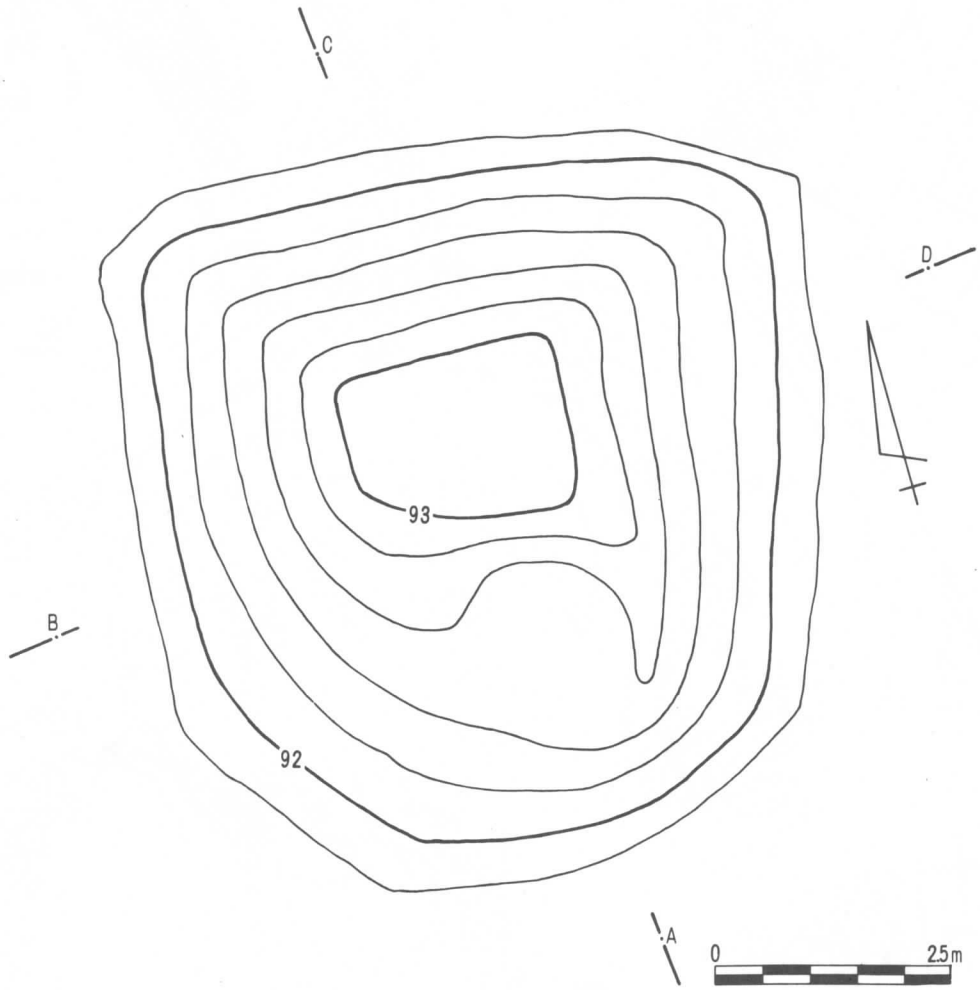


1.町田1号塚　2.長者塚　3.糠塚　4.町田城　5.柿城　6.蛇山城

第1図　遺跡位置図(1：50,000)



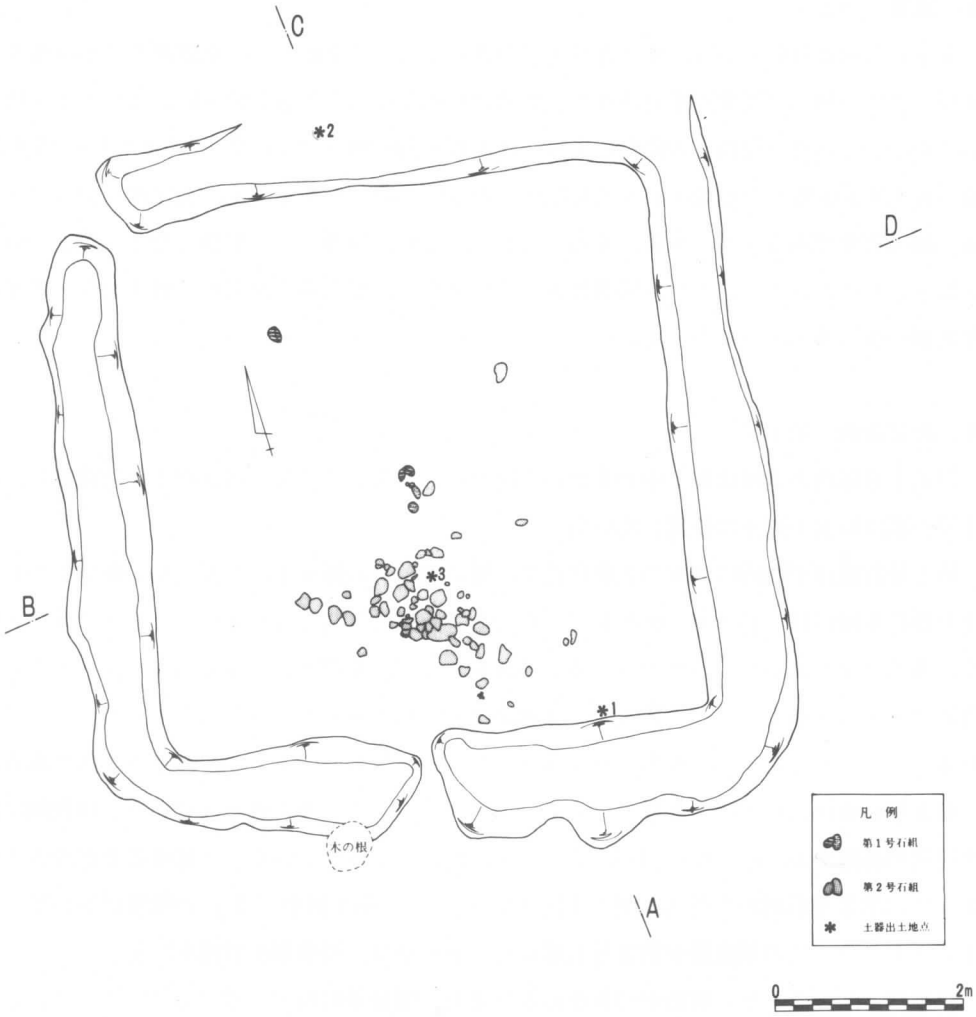
第２図　遺跡周辺図（1：10,000）



第3図　町田1号塚実測図

2．土層序（第6図）

町田1号塚を構築している封土は，基本的には第1層茶色土・第2層黒黄色土・第3層赤黒色土の3層である。第1層は塚の頂部から裾までの表面全体を覆い，丘陵の表土へと続いている。この第1層は樹木の根が張っているためか，横に深く広がっていることが，土層断面から観察される。また，西壁のAポイント寄りにも表土が深く広がっているところがある。これは「外部形態」でもふれた凹地である。この凹地は断面観察から，樹木の抜根による可能性が高い。



第4図　第1号・第2号石組と基底部

第2層・第3層は塚の盛土の主体となる土砂で，旧表土の腐植土と地山の赤色土が入り混り，腐植土の黒色と地山の赤色との混合の度合で分層したものである。この第2層・第3層は第1層ともども色調・かたさなどにより，更に細かく分層される（第6図では細分層線を記入してある)。この第2層・第3層は水平に堆積しており，版築によって盛土されたと思われる。

また，第6層黒色土が約15cm内外の厚さで，周溝で区画された塚の基底部にのみ分布しており，旧表土とみられ，本塚は旧表土の上に構築されたと考えられる。

3．周溝（第4図）

本塚の周溝は外形上から，その存在を予測させるものはなかった。発掘調査で地山面まで掘り下げて，初めて周溝が発見された。周溝は東西及び南北の各方位線にほぼ沿うように方形にめぐっていた。規模は天端幅約1m，底面幅約50～80cmで一辺7～7.5mである。深度は南のAポイント寄りの旧表土からの約30cm（第6図参照）が最も深く，他は押しなべて浅く15～20cm程度である。この傾向は北辺で端的に示され，周溝という形態でなく，段がついているというにすぎない。また，周溝は南辺の中央及び，北西隅で途切れ，橋状になって塚の基底部が塚の外部とつながっていた。

4．内部施設（第4図）

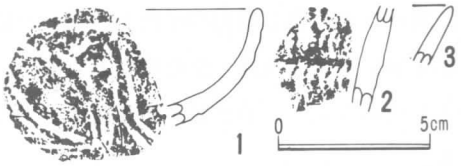
町田1号塚内の遺構は封土中の2組の石組だけである。第1号石組は封土中に位置し，第2号石組は旧表土直上に位置していた。

第1号石組は平面的には塚の頂部付近で，塚の頂部から60cm下，旧表土から60cm上の封土中央部に6個の10～15cm大の礫が並べてあった。石組はきちんと組まれているとは言いがたく，適当に礫が置かれていたという感じである。ただ，平面的にも垂直的にも塚の中央部に位置するという事実から，埋葬もしくは埋経などの位置を示す施設と関連するものかと思われる。が，しかし調査では石組以外の施設及び遺物は発見されず，その性格は不明である。

第2号石組は旧表土の第6層黒色土上に小石から人頭大の礫が敷かれていた。巨視的には半円状の石組から，西と南へ脚が出ているように形づくられている，と見ることができようか。この第2号石組の半円状に囲こまれた空白部――第4図中「3」の位置に須恵器片が1点出土した。この須恵器が第2号石組に伴うか否かは，須恵器が石組中に混じっておらず空白地にあるところから判断がつきかねる。また，第2号石組の下部にピット等の遺構の存在を確認するため，精査をしたが，遺構は発見されなかった。

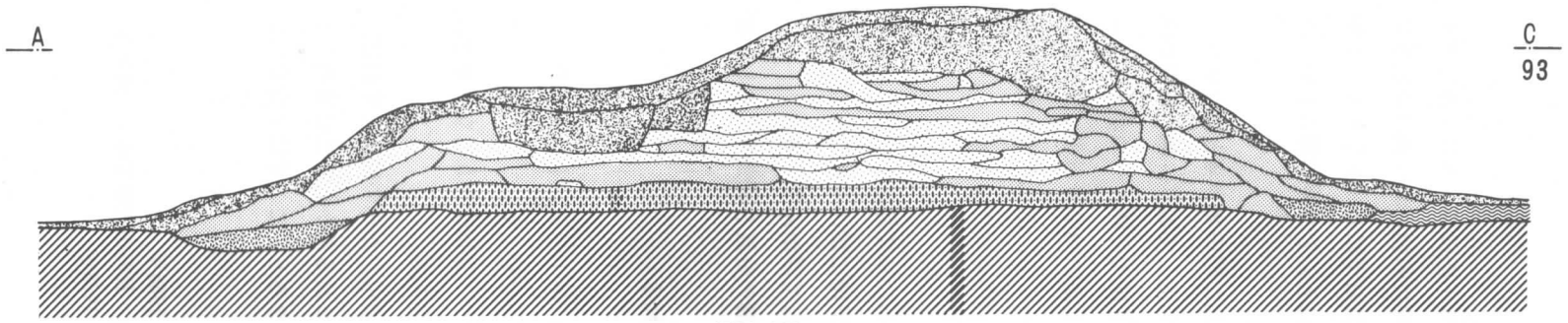
5．遺物（第5図）

本塚出土の遺物は縄文土器が2点，須恵器が1点あるだけである。いずれも基底部に近い位置での出土である。なお，第4図の出土位置番号と第5図の遺物番号は一致する。

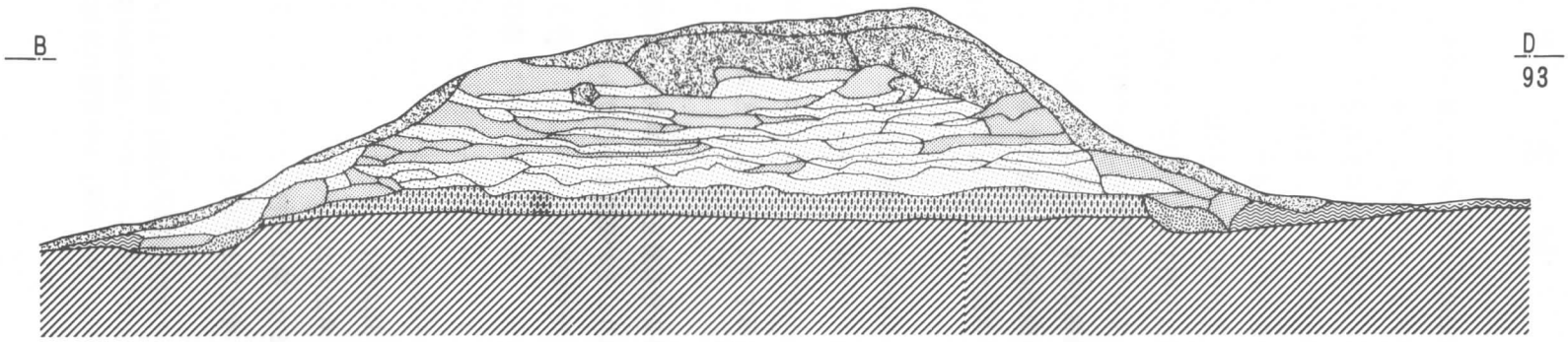


第5図　出土土器

1・2は縄文土器で，1は平行沈線でモチーフが描かれた小形の鉢で，2は爪形文が多段に施されたものである。いずれも縄文前期後半の諸磯式に比類するものと思われるが，特に1の文様がよく判読できず，確かなことは言えない。3は須恵器の坏形土器の口縁部である。小破片のため，時間的位置は不明である。



西壁 土層断面図



北壁 土層断面図

第6図　土層断面図

Ⅳ まとめ

長岡市において，発掘調査が行なわれた塚は糠塚[註1]・中山5号塚[註2]・座禅塚[註2]・本村金塚[註3]など十指にあまるほどの例がある。このうち，本塚と同じように基底部に石組をもつ例は中山5号塚だけである。しかし，中山5号塚は集石中に六道銭が混り，集石下にピットがあり，本塚の石組とはかなり様相が異っている。それでは，ここで類例のほとんどない本塚の石組を考えながら，本塚の性格をさぐってみよう。

第1号石組は平面・垂直的にも塚の中央にあり，先に調査された町田2号塚と同じ状態であるが，本来的な施設は不明である。第2号石組は旧表土面に位置しており，塚の構築が開始される前に設けられていたと思われ，塚の構築に際しての祭祀的な意味をもつかと考えられる。ただ，ここで問題となるのは第2号石組の平面的位置である。第2号石組は基底部の南側にあり，周溝の掘削土をもって盛土すると考えられるところから，既に周溝の縄張りもしくは位置がイメージされていたものと思われ，石組が基底部の中央部に存在しないということが疑問視される。

しかし，これだけの規模をもつ石組が，そこにあって構築にあたって障害となり，除去される可能性も充分にあったであろう。そこで，第2号石組は構築時に設けられたものと仮定して，塚の構築順序のひとつとして，次のような手順が仮説として浮かんでくる。

① ある目的をもって塚をつくろうとし，区域設定としての周溝の位置を縄張り，もしくはイメージされる。

② 周溝の位置内に第2号石組を設け，塚供養の祭祀が行なわれる。

③ そして，周溝を掘り，その掘削土を盛りあげる。

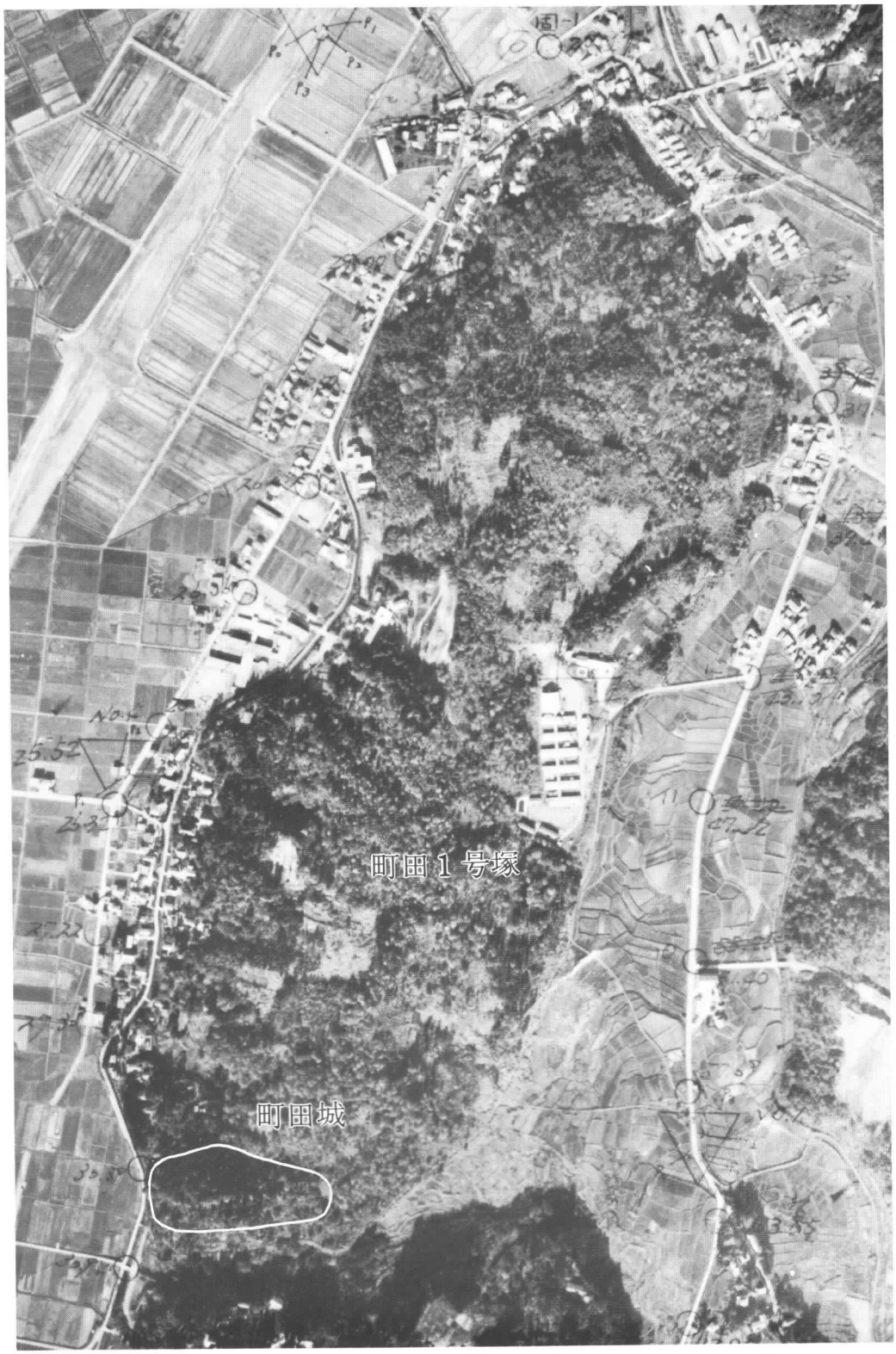
④ 塚の中央部に埋納物を安置し，標示もしくは押さえとして，第1号石組を設置する。

⑤ 第1号石組の設置後，一気に土を盛りあげ，最終的に塚の形を整える。

以上であるが，④のように埋納物を安置したか否かは石組の他に遺物が存在しないなど，問題点が多くある。それ故にひとつの仮説として考えてみたのである。

なお，本塚の構築時間は第2号石組近くの須恵器が，祭祀に使用した坏の破片とすれば，奈良から平安時代とも考えられるが，たまたま第2号石組が組まれる前からそこに存在したことも考えられるし，また，第2号石組と本塚との関連も問題になろう。ここでは平安時代以降につくられたものと考えておくにとどめたい。

註1．中村孝三郎『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館　1966年
　2．駒形敏朗・寺崎裕助『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書』　長岡市教育委員会　1978年
　3．駒形敏朗・寺崎裕助『本村金塚』七軒町遺跡等発掘調査会　1978年

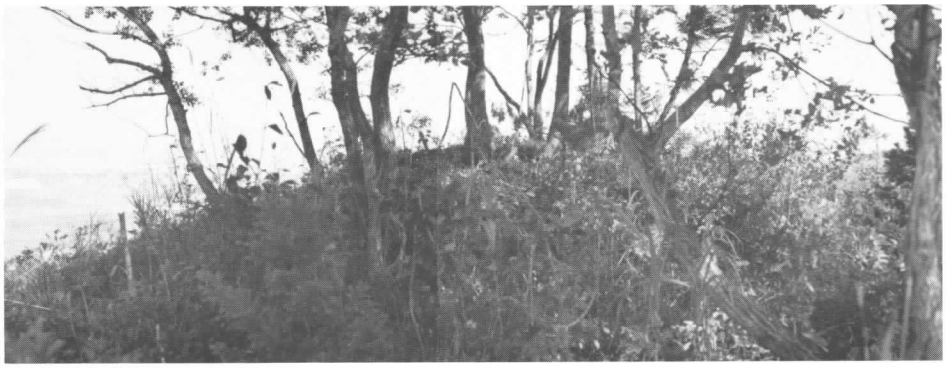


塚付近の航空写真

図版第２図

遺跡遠景(西より)

遺跡近景



遺跡近景

町田１号塚

墳頂部発掘

基底部発掘
（南の木の上から）

断面観察用土手発掘
及び図化作業

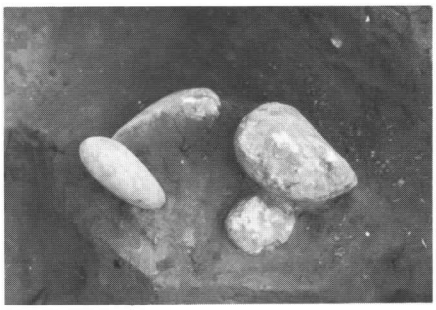
調査スナップ

遺跡近景（樹木伐採後）

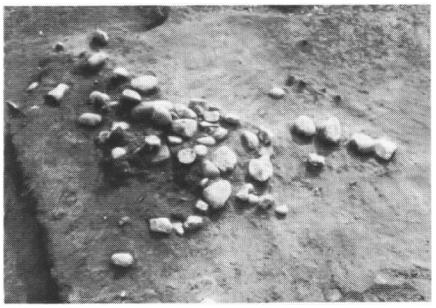
北壁（Ｂ－Ｄ）土層断面

西壁（Ａ－Ｃ）土層断面

土層断面



第１号石組



第２号石組

基底部と第２号石組

基底部

内部施設

町　田　1　号　塚

昭和58年11月25日　印刷
昭和58年11月30日　発行

発　行　長岡市教育委員会
印　刷　㈱第一印刷所
新潟市女池和合町1185番地